

- Press, 1991.
- クリステヴァ、ジュリア 『詩的言語の革命』 原田訳、勁草書房、1991年
 ——『ポリローク』 足立他訳、白水社、1999年
- Lavers, Norman. *Jerzy Kosinski*. Boston: Twayne, 1982.
- Leeds, Barry H. *Ken Kesey*. New York: Frederick Ungar, 1981.
- Lundquist, James. *Kurt Vonnegut*. New York: Frederick Unger, 1976.
- Lupack, Barbara Tapa. *Insanity as Redemption in Contemporary American Fiction*. Gainesville: University Press of Florida, 1995.
- ライアン、デイヴィッド 『ポストモダニティ』 合庭訳、せりか書房、1996年
- リオタール、ジャン＝フランソワ 『ポストモダンの条件——知・社会・言語ゲーム』 小林訳、水声社、1986年
- Madsen, Deborah L. *The Postmodernist Allegories of Thomas Pynchon*. Leicester: Leicester University Press, 1991.
- Maltby, Paul. *Dissident Postmodernists: Barthelme, Coover, Pynchon*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1991.
- McCaffery, Larry. *The Metafictional Muse: The Works of Robert Coover, Donald Barthelme, and William H. Gass*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1982.
- Mellard, James M. *The Exploded Form: The Modernist Novel in America*. Urbana: University of Illinois Press, 1980.
- Merrill, Robert. *Joseph Heller*. Boston: Twayne, 1987.
- Newman, Charles. *The Post-Modern Aura: The Act of Fiction in an Age of Inflation*. Evanston: Northwestern University Press, 1985.
- O'Donnell, Patrick, ed. *New Essays on The Crying of Lot 49*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Olderman, Raymond M. *Beyond the Waste Land: A Study of the American Novel in the Nineteen-Sixties*. New Haven: Yale UP, 1972.
- Patteson, Richard F. *Critical Essays on Donald Barthelme*. New York: G. K. Hall, 1992.
- Pinsker, Sanford. *Joseph Heller*. Columbia: University of South Carolina Press, 1991.
- Porter, M. Gilbert. *One Flew Over the Cuckoo's Nest: Rising to Heroism*. Boston: Twayne, 1989.
- Potts, Stephen W. *Catch-22: Antiheroic Antinovel*. Boston: Twayne, 1989.
- Schatt, Stanley. *Kurt Vonnegut, Jr.*. Boston: Twayne, 1976.
- Schaub, Thomas H. *Pynchon: The Voice of Ambiguity*. Urbana: University of Illinois Press, 1981.
- Schulz, Max F. *Black Humor Fiction of the Sixties*. Athens, Ohio: Ohio UP, 1973.
- Tanner, Stephen L. *Ken Kesey*. Boston: Twayne, 1983.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. New York: Harper & Row, 1971.

《付記》

本稿は、日本アメリカ文学学会第38回全国大会（1999年10月10日、北九州大学）のシンポジウム「幽閉とアメリカ文学」において、1950年代以降のアメリカ文学を担当し、「1960年代の小説と幽閉状況」と題して口頭発表したものを、論文形式に書き改めたものである。

- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Scribners, 1925, rpt. 1992.
- Gilman, Charlotte Perkins. *The Yellow Wallpaper*. New York: The Feminist Press, 1892, rpt. 1973.
- Heller, Joseph. *Catch-22*. New York: Dell, 1961, rpt. 1990.
- Kesey, Ken. *One Flew Over the Cuckoo's Nest*. New York: The Viking Press, 1962, rpt. 1977.
- Kosinski, Jerzy. *Being There*. New York: Bantam, 1971, rpt. 1972.
- Lewis, Sinclair. *Main Street*. New York: Signet, 1920, rpt. 1961.
- Norris, Frank. *The Octopus — A Story of California*. New York: Doubleday, Page & Company, 1901, rpt. 1983.
- Plath, Silvia. *The Bell Jar*. London: Faber and Faber, 1963, rpt. 1966.
- Pynchon, Thomas. *The Crying of Lot 49*. New York: Harper & Row, 1966, rpt. 1990.
- Vonnegut, Kurt. *Slaughterhouse-Five*. New York: Dell, 1969, rpt. 1991.
- West, Nathanael. *Miss Lonelyhearts & The Day of the Locust*. New York: New Directions, 1939, rpt. 1962.

〈第2次文献〉(批評)

- ボードリヤール、ジャン 『シミュラークルとシミュレーション』 竹原訳、法政大学出版局、1984年
- Caramello, Charles. *Silverless Mirrors: Book, Self & Postmodern American Fiction*. Tallahassee: University Press of Florida, 1983.
- Chénétier, Marc. *Richard Brautigan*. London and New York: Methuen, 1983.
- Colville, Georgiana M.M. *Beyond and Beneath the Mantle: On Thomas Pynchon's The Crying of Lot 49*. Amsterdam: Rodopi B.V., 1988.
- Cronin, Gloria L. & Blaine H. Hall, eds. *Jerzy Kosinski: An Annotated Bibliography*. New York: Greenwood Press, 1991.
- デリダ、ジャック 『根源の彼方に — グラマトロジーについて』 足立訳、現代思想社、1972年
- イーグルトン、テリー 『ポストモダニズムの幻想』 森田訳、大月書店、1998年
- フーコー、ミシェル 『監獄の誕生 — 監視と処罰』 田村訳、新潮社、1977年
——『狂気の歴史』 田村訳、新潮社、1975年
- Foster, Edward Halsey. *Richard Brautigan*. Boston: Twayne, 1983.
- Giannone, Richard. *Vonnegut: A Preface to His Novels*. Port Washington: Kennikat Press, 1977.
- Grant, J. Kerry. *A Companion to The Crying of Lot 49*. Athens and London: The University of Georgia Press, 1994.
- ハーバーマス、ユルゲン 『近代の哲学のディスクルス I・II』 三島訳、岩波書店、1999年
- Harris, Charles B. *Contemporary American Novelists of the Absurd*. New Haven: College & University Press, 1971.
- Klinkowitz, Jerome. *Slaughterhouse-Five: Reforming the Novel and the World*. Boston: Twayne, 1990.
——— *Donald Barthelme: An Exhibition*. Durham & London: Duke University

では最後に、何故アメリカ文学には「幽閉状況」を描く作品が多いのかという問題を考えてみると、ピューリタニズムの閉鎖的価値観や、合理主義の歴史が生み出す人間性拒否の体制が、個人を呪縛し幽閉するということはいうまでもないが、しかし、これはまた逆に「幽閉される」個人の側から見れば、自由・平等という国家の理念がアメリカ国民の「意識」の中に深く浸透しているために、社会における個人の幽閉感が一層強く「意識される」ことになるとも言えるのではないか。つまり、ピューリタンの倫理観を基盤とした自由・平等という理念が、努力すれば、当然、幸福を得られるはずだという考えを広めることとなり、従って、理想を求めて前進することが一つのオブセッションとなってしまう、努力できない者、前進できない者を疎外し、幽閉状況に追い込むこととなると言える。その結果、作家たちは因習的価値観や不条理な管理体制に激しく対抗して、この「幽閉状況」からの脱出と再生の方法を模索していくのだろう。

「閉じ込められる」という状況は、その中への「退行」と新たなものの「創造」の芽を同時に孕むものである。しかしながら、〈新しいパラダイム〉の創造はいつの時代にも困難を伴うものである。特に、60年代のアメリカの社会・文化的状況は、人々に方向感覚の喪失をもたらし、袋小路に捕らわれた、出口なしの状況を強めているといえよう。

《参考文献》

〈第1次文献〉（作品）

- Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. Boston: Houghton Mifflin, 1918, rpt. 1961.
- Anderson, Sherwood. *Poor White*. New York: The Viking Press, 1920, rpt. 1966.
 ————. *Winesburg, Ohio*. Harmondsworth: Penguin, 1919, rpt. 1977.
- Atwood, Margaret. *Surfacing*. New York: Fawcett Crest, 1972, rpt. 1987.
- Barthelme, Donald. *Snow White*. New York: Atheneum, 1967, rpt. 1972.
- Brautigan, Richard. *Richard Brautigan's Trout Fishing in America, The Pill versus the Springhill Mine Disaster and In Watermelon Sugar*. New York: Houghton Mifflin, 1968, rpt. 1989.
- Chopin, Kate. *The Awakening*. New York: W.W. Norton, 1899, rpt. 1976.
- Dos Passos, John. *Manhattan Transfer*. Boston: Houghton Mifflin, 1925, rpt. 1976.
- Dreiser, Theodore. *Sister Carrie*. New York: W.W. Norton, 1900, rpt. 1970.
- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. New York: Random House, 1952.

Sinclair Lewis の *Main Street* (1920) に見られるピューリタンの因習の「他者」の排除と疎外状況、Dos Passos の *Manhattan Transfer* (1925) における浮浪者の大都市崩壊幻想、Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) の都市のゴミ捨て場としての「灰の谷間」、Nathanael West の *Miss Lonelyhearts* (1933) のエントロピックな宇宙観、*The Day of the Locust* (1939) の夢の廃棄場としてのハリウッドなどに認められる。人間の理性による「進歩の思想」の信仰の結果、このような不安な社会情勢が現出し、これが60年代の作品には更に極端な形を取って表れる。Barthelme や Brautigan の〈大量消費とガラクタ文明〉、Pynchon の〈エントロピー〉、Kesey の〈電子工学による管理統制〉、Kosinski の〈テレビによる世論操作〉、Heller や Vonnegut に見られる〈他者の排除〉など、まさにこの延長線上にあると言ってよい。

60年代においては、社会的には、〈閉じた円環〉のような後期資本主義社会の〈全体化の社会構造〉が、〈多様性〉〈差異〉〈流動性〉を封殺するために、未来への展望は更に不透明になり、そこからあらゆる既成の価値観が再検討され、柔軟な〈新しいパラダイム〉が模索された。また、文学的には、「小説の死」の意識と相俟って、作家の「言葉」への感覚は研ぎ澄まされ、小説の斬新な形式がどの時代よりも強く探られた。ただ、どの作品の結末にも〈幻想性〉が共通して認められることは見逃せない事実である。

現代の思想家ジャン＝フランソワ・リオタール (Jean-François Lyotard) は、〈ディスコース〉の形式は可能な限り自家製の〈権威〉を生成せざるを得ないので、残されたものは「言語ゲームのしなやかなネットワーク」だけであると述べ、人間解放に絶望的である (『ポストモダンの条件——知・社会・言語ゲーム』小林訳、水声社)。一方、ユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas) は近代の理性による啓蒙主義を見直し、コミュニケーションの合理性をめざすことによって理想的発話状況が可能であると考え (『近代の哲学のディスクール』三島訳、岩波書店)。また、デリダは、暴力を避けられないのが全てのディスコースの宿命であるが、それでも〈最小の暴力〉を内包する〈別のディスコース〉を求めることが可能であると説く (『根源の彼方に——グラマトロジーについて』)。

しかしながら、現代の作家たちはカオス的状况の現代において、思想家たちのように〈新たなパラダイム〉を明確に提示することはできず、〈幻想的な結末〉を提示し、柔軟な〈パラダイム〉を暗示するに留まる。ここに、ポストモダン社会に生きる現代作家の、カオスを前にした世界了解の難しさが表れていると考えたい。いかなる〈パラダイム〉も、また新たな〈暴力の発現〉を免れないのであるから。

Pynchon は、メタファーの作用は「立脚点によって真実にも虚偽にもなる」(129) と指摘しているが、Kosinski のこの作品の場合には、Pynchon の場合とは逆に、このメタファーは〈原初的世界〉から〈文明社会〉へと変換されるというプロセスを取る。このメタファーは「諸刃の剣」であり、文明社会の言語を解体して新たな視野を提供するという長所をもつと同時に、それが体制側から恣意的に合理的に利用される時には、指導者の国家支配のための言語操作の道具に供され、ロゴス中心主義の現代文明社会を逆に強化することにもなる。Chance の〈庭のパラダイム〉は、その本来の自然の意味から〈全体化のパラダイム〉へと恣意的に変換され、後期資本主義社会において不思議なりアリティーを持つテレビの世論操作の力を借りて、アメリカ国民全体をを支配するという危険な結果を招くのである。そのような体制の持つ危険な世論支配をよく理解している作者 Kosinski は、Chance が大統領の国家支配体制の中に組み込まれようとする寸前に、再び〈幻想的な〉庭の世界に退行させる。

Chance の〈庭の言語〉は〈文明の言語〉に対する新たな言語として意味があるのだが、それが〈文明の言語〉のメタファーの中に合理的に組み込まれてしまうということは、彼の〈パラダイム〉が現代社会においてはもはや存在しえないことを示している。彼に残されるのは、庭の世界に「自閉」という選択の道のみである。極度なロゴス中心主義を基盤に発達し複雑化した〈文明のパラダイム〉のなかでは〈原初的パラダイム〉は存在できない。だからといって、作者 Kosinski は、Chance のような自我を欠いた「そこに在るだけ」の存在が人間的な生き方であると言っている訳ではない。Brautigan のエデン的〈反世界〉の場合がそうであったように、現代は生き方の選択が難しいのである。

以上、ここでは60年代作家の作品を取り上げて、幽閉状況をもたらすものが、ロゴス中心主義を基盤に発達した合理主義の社会構造であるという考え方を提示したが、この時代の背景としての後期資本主義社会の特徴は時代を溯れば、19世紀末期にすでにその萌芽を認めることができる。Theodore Dreiser の *Sister Carrie* (1900) における都市化と大量生産と疎外状況と商品フェティシズム、Frank Norris の *The Octopus* (1901) における鉄道というシステムの〈蛸の足〉のような労働者支配、Sherwood Anderson が *Poor White* (1920) で描いた農業機械に支配され人間性を失い始める農民の姿などである。また、20世紀初頭には、Henry Adams がダイナモに希望と不安を見ていたし、その後のアメリカの陰鬱なイメージは、Anderson の *Winesburg, Ohio* (1919) や

この共同体の住民のように、全ての物事を「起こるがままに受け入れる」という柔軟な〈新たなパラダイム〉は、長い歴史が構築してきた言語・論理を意識的に拒否する反ロゴス中心主義である。つまり、ガラクタの山と化した高度機械文明社会と対峙するこの「西瓜糖の世界」は、言語中心主義の歴史が生み出した膨大なロゴスの世界を拒否することから成り立っているといえよう。それゆえに、作品中の「書物の山」は、過去の「忘れられた世界」に意識的に封印されるか燃料として抹殺される(65)。また、文明の残骸は明瞭な言葉では表現できず、語り手がこの世界で35年ぶりに書いている「書物」も、論理や説明や理性的判断を排して事実を砂糖で包むように記述するという、単なるイメージの羅列になっている。

作者は、作品の最後まで「不眠症」を克服できない語り手を通して、この〈幻想的ユートピア〉も最良の世界ではあり得ないことを暗示している。〈反世界〉に自閉することは一つのサバイバルの方法ではあろうが、この世界も「危ういバランス」(1)を保った世界に過ぎない。

⑦ Jerzy Kosinski, *Being There* (1971)

父親とも神とも考えられる庇護者 Old Man の管理下の「庭」というエデン的〈反世界〉に幽閉された姓名不詳の主人公 Chance は、安全に守られた「庭の世界」を出ることによって Chauncey Gardiner という固有名詞を「他者」から付与され、社会システムに取り込まれる。この歴史から切り離された「庭」で育った Chance は、歴史がもたらす経験とは無縁の「自我」の欠如した「空白のページ」(106)として存在し、社会の方がその「空白」に意味を読み込む。そして彼は個人的背景を証明する「言語」による「記録文書」の不在のゆえに副大統領候補にまで祭り上げられ、自己の意思とは無関係に社会的上昇を果たすことになる。

彼は「庭」という原初的言語世界・無歴史の世界に侵入した歴史の産物といえるテレビが発する文明の言語を模倣することによって〈世界内存在〉となり、彼の〈庭の原初的言語〉は文明社会の「他者」によってメタファーとして変換されて、次々に〈文明の言語〉を増殖させていく(45)。彼の庭の言語、つまり植物の生と死と再生というサイクルは〈原初的パラダイム〉であるが、この〈異質なパラダイム〉が現代社会のなかに唐突に脈絡もなく侵入するとき、文明社会の側はそれを複雑な〈文明のパラダイム〉のなかに「素晴らしいメタファー」(34)として取り込む。彼のいう「自然のサイクル」は、メタファーという言語操作によって不況にあえぐアメリカの「経済状況」に対処する方策として大統領に利用される。

principle)」(181)、つまり、また再び〈新たなパラダイム〉を求めて旅立つ。Snow Whiteは「再処女化 (revirginize)」(181) されて天に昇り、再び神話化される。どちらもまた再び新しい歴史の時代に現れるのであろうが、それほど希望に満ちた出発とはいえない。

結局、彼らは現代ではすでに現実性を失い〈幻想的〉になった『白雪姫』の神話を典型化してきた言語とテキストに呪縛されている。そして、Snow Whiteの場合は、その神話を相変わらず信奉しているロゴス中心主義の現代アメリカ社会にも呪縛されている。歴史は相変わらず無為に神話構築というサイクルを継続していくのだろう。作者は神話のパロディー化によって歴史と言語への疑念を表明するのだが、堂々巡りを暗示する結末は、*Lot 49*と同様に極めて不透明である。

⑥ Richard Brautigan, *In Watermelon Sugar* (1968)

この作品と次に扱う Kosinski の *Being There* は、これまで扱った作品と違って、エデン的〈反世界〉に自閉する人物を通して現代アメリカを見ている。

「忘れられた世界」という文明の歴史から隔離された共同体である iDEATH という新しい原始的・エデン的世界に、自己を幽閉した「名前をもたない」アダムの主人公は、西欧の歴史が良しとしてきた「肥大化する自我」や「欲望」を消し去り、リアルな経験を甘い砂糖で包んだ自我滅却の原始共同体、つまり、歴史に背を向けた「新世界」に自己を委ねている。「西瓜糖の世界」の住人たちは、これによって閉塞状態の現代世界に代わる〈新たなパラダイム〉の世界を構築しようと試みている。

ただ、この〈第二のエデン〉も、過去の文明社会から完全に隔離されている訳ではなく、「忘れられた世界」の周縁に位置する。それゆえに、自我を滅却できない反共同体的人物 inBOIL や Margaret は、人間の言葉を理性的に話しながらも人間の殺戮を繰り返してきた「虎たち」の時代や、産業主義の残骸から成る「忘れられた世界」に好奇心を示す。彼らは幻想的共同体に対して批判的視座を提示するのだが、文明の残骸に知識を求め、好奇心を示す二人は、自殺によってエデンから消えて行かざるを得ない。そして、異端者を穏やかに排除したこの共同体の住人たちは何事もなかったかのように平和に生き続ける。しかし、この一見したところ平和に見える原始共同体も、やはり文明社会の連続体に過ぎず、エデン的自然の風物にも、「数インチの河」や「人工孵化されるマス」のように、どこか人工的な不自然さが伴い、語り手は文明社会の言語体系を拒否しようとしながらも、やはり不明瞭な「言語」を使わずにはおれない。このエデン的新世界にも、〈古いパラダイム〉は絶えず侵食し続けている。

することはない。結局は、旅は、未決状態のまま残され、永遠に閉じられたままで「自閉的」に反復するだけである。このように明確な未来が示されない旅の結末は、堂々巡りの模索の旅、出口なし (exitless) の現代世界を暗示する。これは、現代社会に生きる現代人の方向性の発見の難しさを示している。彼女の未来は相変わらず〈幻想性〉の強い不透明状態に包まれている。

⑤ Donald Barthelme, *Snow White* (1967)

Snow White はある都市のアパートに幽閉状態にあるが、現代アメリカにおいてはこの幽閉から解放すべき理想の王子様も小人たちも不在である。彼女は家事に明け暮れる〈女らしさ〉の神話の枠組みから抜け出して、フェミニストとして、性差的幽閉状況を脱する〈新しい言葉〉を探ろうとする (クリステヴァ『詩的言語の革命』)。つまり、言語がロゴス中心主義の果てに〈ガラクタ言語〉に墮したにもかかわらず、依然として続いている現代の父権的社会構造を解体して、女性としての〈新しいパラダイム〉を探ろうとしている。しかし、Margaret Atwood の *Surfacing* (1972) の主人公とは対照的に、〈古い言葉〉から解放されて「これまでに聞いたことのない言葉」(6) を発見し、ロゴスを多元化することはできない。つまり、神話の役割を果たすのに必要な〈男らしさ〉を失った王子的人物 Paul の高貴な血筋 (27) の発現を期待して、Pynchon の *Oedipa Maas* と同様に、グリム童話のラプンツェル姫のようにアパートの部屋から長い髪の毛を垂らして「待機する」というフェミニストには矛盾した行動を取る。結局、彼女は日和見的なフェミニストにしか成れず、旧来の神話の枠組みに留まる。

一方、7人の小人たちも、理想から墮した *Snow White* に性的奉仕をさせられることに不満を感じながらも、資本主義体制の中で彼女に経済的支援をしながら、退廃した生活を送り、〈男らしさ〉を失い、行き場を失っている。こうして、社会も男性も事物も疲弊し、極限的な「がらくた現象 (trash phenomenon)」(97-98) を呈した後期資本主義社会のなかで、小人たちも *Snow White* も充足感を持たず、より〈新しいパラダイム〉を発見することはできない。

この作品において体制側からの幽閉感覚が他の作品ほどには強くないのは小人たちが資本主義社会の擁護者になっていることが1つの理由であるが、これはまた、大統領の無策のために疲弊の極限状態に達した、エントロピーへと向かう〈ガラクタ文明〉においては、「疎外は至るところに染み込んでいる」(131) からでもある。

作品の最後で、7人の小人たちは能力不足の Bill の代わりに、より実務的な Dan を指導者を選び、〈理想の白雪姫〉に奉仕する「新しい原理 (a new

閉している現代人の自我の表象である。「塔」を取り巻く外部世界は、熱力学エントロピーの結果として「多様性」(181)を欠く文化的均質状態に陥り、情報エントロピーのために言語情報の飽和・混乱状態を生み出した後期資本主義社会である。

この作品は「閉ざされた塔」「トライステロ・システム」「畝」「袋小路」など幽閉のイメージに溢れている。この幽閉のイメージの飽和は、論理・理性によって人間が自立し、自己充足できると考えていた近代の信念が揺らぎ、疎外と意思伝達の不能に至るところに見いだされるようになった現代世界に Oedipa が幽閉されていることを示している。彼女は女性として、また一人の人間として、トライステロの謎の中に迷い込み、その過程において、カウンターカルチャーに触れ、楽天的な合理主義的思考に支配されていた自己の生き方を再考し、新たな生きる方向性を模索する。これは、いわば、歴史の中でロゴスを基礎に構築してきた結果、混沌状態を呈した現代社会のシステムからの解放のための〈パラダイム〉といえる。彼女の作品中の旅は、この〈新しいパラダイム〉の発見、新しい伝達言語発見の旅である。

作品の中で頻繁に言及される記号や図形やメタファーは、言葉と社会の裏に潜む〈異質な秩序〉の世界、〈異質なパラダイム〉の世界を、理性・論理に支配されてきた彼女が想像力によって読み取るための解放的手掛かりとなることを暗示している。この記号的読み取りは、クリステヴァの言うところの、秩序づけられ合理的に受容されているものが、「異質なもの」「非合理的なもの」(186-215)によって脅威に晒される過程を表している(『詩的言語の革命』)。それゆえに、作者 Pynchon は、この〈異質な世界〉が、Oedipa 自身がそれまで捕らわれてきた体制側のロゴス中心主義の解体によって初めて見えてくるように作品を作り上げている。それによって、トライステロが表すところの体制から〈見捨てられた〉弱者の世界、反体制の〈もう一つのアメリカ〉の存在の可能性が暗示される。それまで体制側の言葉・論理に捕らわれていた Oedipa は、記号や図形やメタファーの複雑な構造の読み取りを通して〈異なるパラダイム〉の世界を初めて垣間見ることになる。これは想像力を駆使した〈変容する意味〉のパラノイア的読み取りであり、ロゴス中心主義への批判となっている。

しかしながら、社会も男性も疲弊してしまった現代においては、この〈異質なパラダイム〉の世界も真実のものか、虚偽あるいは〈幻想〉であるのか、最後まで判然としない。ただ、Vonnegut も言うように、〈楽しい嘘〉はないよりもまだだろう。Oedipa の探求の旅は、彼女が作品の冒頭で、「魔法」(21)を解いてくれる「騎士的」(22)人物を求めていたように、外部の他者に依存して、〈閉じた円環〉を破ってもらうという他力本願の態度では、決して完結

リカ人の「愛国心」の欠如を嘆く Dunbar に対して、Yossarian はアメリカには「まともな者に投票する者はいない。愛国心 (patriotism) もない……。愛母心 (matriotism) もない」(3) と茶化している。軍隊の「論理」の基礎としてある “patriotism” は、言葉のとおり〈男性的なもの〉であるが、それに対するものとしての “matriotism” という〈女性的なもの〉を通して、〈新たなパラダイム〉が獲得されるように工夫されている。つまり、Yossarian は戦争の犠牲者である Luciana や「Nately の女」の愛と勇気を見ることによって、「弱者」への理解を深め、「他者」への責任を自覚する。それゆえに、彼が軍事システムから逃亡しようと目論むスウェーデンは、「女性たちが非常にすばらしい。国民が非常に高等である」(455) 社会的抑圧の少ない国なのである。

作品の結末は Yossarian のスウェーデンへ向かう飛翔 (ジャンプ) であり、これはアメリカの軍事組織の不条理な〈全体化のパラダイム〉から、人間の〈差異〉〈多様性〉を尊重する〈新たなパラダイム〉の世界への飛翔である。しかしながら、Cuckoo's Nest と同じように、新天地にも軍事システムは手を伸ばしてくるだろうし、飛翔は、戦闘機の旋回や Catch-22 の「とぐろを巻く論理」のように、「旋回」し続ける〈幻想の飛翔〉に終わるかもしれない。ただ、アメリカの軍事システムから脱出し、〈異質のパラダイム〉を求めようと「試みる」ことに一筋の光がある。

④ Thomas Pynchon, *The Crying of Lot 49* (1966)

「檻 (cage)」のイメージを使って女性の性差的幽閉状況を描いた女性作家の作品としては、早くは Charlotte Perkins Gilman の “The Yellow Wallpaper” (1892) や Kate Chopin の *The Awakening* (1899) があった。また、50年代の「赤狩り」の時代を背景として、「檻」のなかに幽閉された女性を描いたものとして Silvia Plath の *The Bell Jar* (1963) が挙げられる。これら三作品は共に、父権的社会の抑圧的状况の中で、女性が自己表現の手段 (言葉・芸術) を奪われた状況を描き出している。ここで扱う *Lot 49* と次の *Snow White* は、女性の社会意識が強まった60年代に執筆された男性作家の作品である。この二作品共に、エントロピーへと向かう現代アメリカ社会を背景にした女性の幽閉状況を扱った作品となっている。

主人公 Oedipa Maas の平凡な主婦としての生活は、閉ざされた「塔」(tower) のなかへの幽閉状態を示す (21-22)。これはグリム童話のラプンツェル姫の塔のなかへの幽閉を下敷きにしているが、疲弊した現代文明の中では、幽閉状態から解放する王子的人物の出現の可能性は低い。作品の中で「至る所にある」と説明されるこの「塔」は、現代文明の発達の結果生まれた疎外状況の中で自

目論むロゴス中心主義に代わる一つの方策ではある。

しかし、Billy のこの〈新たなパラダイム〉に関して、語り手の「私」は、作品の最後で、Tralfamadore 哲学も新たな生き方として「それほど有頂天にはなれない」(211) と相対化して、これもやはり一時的な処世法の暗示にすぎないことを強調している。ロゴス中心主義が生み出した戦争と暴力の「歴史」をくい止めることは「反氷河小説」(3) を書くことと同じように難しいことである。

③ Joseph Heller, *Catch-22* (1961)

アメリカの後期資本主義管理統制社会のパロディでもあるこの作品の軍隊組織は、不条理な軍隊の規律とそれを正当化する恣意的な論理中心主義に支配された世界である。この世界に幽閉された兵士 Yossarian は、軍隊の論理が正当化する不条理な狂気的世界において、狂気に対して「理性」で対抗するのは不可能であるために、彼自らが狂気を装ったり、ギャグや語呂合わせによって体制側の「論理」をズラし、〈意味を変容させて〉抵抗し、ただ生き延びることに利己的に執着する。「愛国心」という名の下に不条理を強制する軍の上層部に対して、自らも不条理な行動と言語操作を駆使することによって、主人公は逆にこの不条理な状況に弱々しくも対抗している。例えば、軍が統制的管理のために行う手紙の検閲の任務を受けた彼は、「手紙のリズム」を壊し、文のシンタックスを解体し(2)、ロゴスを多元化し、細分化し、軍の「論理」の基礎である「言語」に抵抗を示している。ジュリア・クリステヴァに従えば、秩序だったシンタックスの解体行為は、権力をも含意したロゴスの多数化、細分化、微分化、無限化、他化を表し、これはポリロゴス(多数のロゴス)生む(169-179)。故に、これは論理や権力の多数化、他化でもある。つまり、ロゴスの脱権力化である。また、このロゴスの多数化は、破砕のままに捨て置かれるのではなく、無限の多意味として再生しうるものである(『ポリローグ』足立他訳、白水社)。こういう世界において、「幽閉状況」を生み出す最も大きなものは、とぐろを巻くような *Catch-22* という軍規である。これは、兵士が出撃を免れるために狂気を装えば出撃任務を解いてもらえるのだが、任務免除を願い出ればそれは合理的精神を有する証拠となり、狂人とは見なされないという封じ込めのための軍規である。つまり、論理の操作によって不条理も条理に変えてしまう恣意的な軍規である。Yossarian の抵抗はこのような軍事システムの〈不条理なパラダイム〉の解体による〈新たなパラダイム〉の発見の試みであるといえる。

では彼の〈新たなパラダイム〉とは何であろうか。作品の冒頭部分で、アメ

(自然)が危険な車(文明)の方向に向かったように、彼はハイウェイに「飛ぶかのように」(310)走りだすが、体制の影は絶えず付きまとう。インディアン集落は跡形もないかもしれないし、「コンバイン」はカナダまで電子工学の触手を伸ばしているかもしれない。未来への夢は、依然「幻想」に包まれている。

② Kurt Vonnegut, *Slaughterhouse-Five* (1969)

主人公 Billy Pilgrim は第二次大戦においてドレスデン爆撃を体験する。彼は大戦中は捕虜収容所に幽閉され、また大戦後はSF幻想の中に自閉している。この作品には至るところに幽閉のイメージが認められるが、では、幽閉状況によって作者の意図する所は何であろうか。

ドレスデン爆撃はナチズム撲滅という、所謂「正義」の戦いであったが、そのために多数の民間人が犠牲にされた。このような戦争における善悪や正義などの観念の論理の恣意性は、二項対立的思考であるロゴス中心主義の危険性を露にする。この戦争体験の精神的外傷は、戦後豊かな生活を送りながらも生きることに無感動な Billy の絶えず「むせび泣く」行為に根強く残っている。

戦後のアメリカ社会にも、大戦時と同じように、戦争や暴力や死は至るところに認められる。彼は家庭生活においては、妻や娘から父親の役割を奪われ、Pilgrim 家の父権的な〈アメリカの夢〉の達成の単なる道具的存在に貶められている。また、家庭の外のアメリカ社会にはベトナム戦争や、ケネディ兄弟やキング牧師の暗殺という暴力や死が相変わらず横行している。このような、人間的「感情」を封じ込める社会の中で、彼は時間旅行とSF幻想に自閉し、そこから主観的に世界受容の方法を探ろうとする。

近代の歴史が基礎としてきたロゴス中心主義は悲惨な戦争を正当化し、大戦後も「正義」名の下に若者達を相変わらず戦場に送り出している。戦後アメリカ社会は、これまた同じく合理主義によって資本主義的社会構造への同調を人々に強要する。このような社会においては、人間に本質的な〈感情〉や〈差異〉は、〈論理〉によって封殺される運命にある。

こういう「出口なし」の状況の中で、Billy は、地球外惑星 Tralfamadore 星の地球とは異なる哲学に触れることによって西欧の歴史を再考しようとしている。Billy は「道化」として描かれるが、道化は現実を洞察する者でもある。語り手の「私」が説明するように、Billy は時間旅行とSF幻想によって、新しい「宇宙を再発明しよう」(101)としている。つまり、ロゴス中心主義に代わる柔軟な〈新たなパラダイム〉を求めているのである。彼が Tralfamadore 人から学ぶ想像力による記号的読解法や、多様な「性」の概念や、線状的時間を解体して「幸せな瞬間に意識を集中する」(117)方法は、〈意味の固定化〉を

めに「言葉」を失い、自己を病院の体制に馴化していく。患者たちを体制の〈パラダイム〉に従うように改造し規格化することが任務である彼女は、組織のロボットとして無表情な仮面を着け、女性であることを隠蔽すべく男性的な機械のイメージで武装している。彼女は体制の手先として、「飴と鞭」で患者たちを統制する。病院の規則に反抗する患者に対しては、これを重症の「狂気」と断定し、Silvia Plathの*The Bell Jar*のように、電気ショックによって洗脳するか、ロボトミーによって反抗的な「言葉」を剝奪し、異質な論理を排除する。ここでは、作者は、正気か狂気かを決定する体制そのものの信頼性を問い、判断の際の〈権力の力学〉に疑問を投げかけている。つまり、フーコーが指摘するように、全ての〈ディスコース（言説）〉は〈権力への意志〉を内包しているのである（『狂気の歴史』田村訳、新潮社）。また、ジャック・デリダ（Jacques Derrida）は、ディスコースの〈原暴力性〉を指摘し、近代の階層秩序的二項対立は西欧の排他性としてあらわれ、ヨーロッパの〈ロゴスの帝国主義〉が世界中に自己を押し付けることになったと説いている（『根源の彼方に——グラマトロジーについて』足立訳、現代思想社）。

このような女性と体制の共同は、体制強化を促し、これは母方の姓をもつ語り手 Bromden のアイデンティティ形成にも大きな影響を与えている。体制と結託した彼の白人の母親は、体制によるインディアン居住地の買収に加担し、酋長である父親から男性的な野生の力と言葉を奪い取る。また、Bromden は、英語を話せるにもかかわらず、インディアンという人種的差異のために体制側の役人から無視され、Ralph Ellison の“invisible man”のように、「見えない人間」にされてしまう（201-202）。作品の現在において、彼はdeaf-muteを装い、体制に脅え、「言葉」を自由に操れない。

この病院に送られてきた救世主 McMurphy は Big Nurse の支配体制に脅威を与える。彼は、野性的な生命力と快楽的「笑い」によって、体制側の〈全体化のパラダイム〉を突き崩す破壊的解放性を持ち込む。この「笑い」という声の作用は、ジュリア・クリステヴァ（Julia Kristeva）が言う、秩序づけられ合理的に受容される主体に対する「異質なもの」「非合理的なもの」（250-252）の脅威である（『詩的言語の革命』原田訳、勁草書房）。これによって患者たちは幽閉状態の中で失っていた自我を回復し、Bromden は体制に剝奪されていた発話という言語能力を取り戻し、McMurphy の生命力を象徴する「手」の力を吸収して、精神病院を脱出する。彼は体制側のロゴスによる合理主義が生み出したテクノロジーの「文明」を拒否して、故郷のインディアン集落を經由して、「自然」の豊かなカナダへと逃れようと試みる。しかし、この〈新しいパラダイム〉の世界への脱出も〈幻想の飛翔〉に終わるかもしれない。かつて犬

〈原始共同体〉〈庭 (garden)〉というエデン的な〈反世界〉に自閉する人物を描いている。

ここでは、技術的発展と経済成長による近代の「進歩の思想」を支えてきた、ロゴス中心主義を基盤とする合理主義の社会構造が、幽閉状況を生み出したと考えて、それぞれの作品を検討してみたい。

初めに、デイヴィッド・ライアン (David Lyon) が、その著書『ポストモダニティ』(合庭訳、せりか書房)において述べている「近代」の特徴について簡単に触れておきたい。ライアンは、「理性の役割を強調し神の介入を貶めることによって、神の摂理の世俗版ともいうべき進歩の観念の種が蒔かれた」(17)と近代の起源を明確にし、更に、「近代化」とは「技術に導かれた経済成長と結び付いた社会的政治的過程と要約し性格づけられる」(44)と述べている。そして、彼が「近代」の成果として挙げているのが、合理化、分業制度、官僚制、軍事技術の進歩、都市化、学校・病院・軍隊における監視態勢と管理矯正、制度化、植民地主義、男女の役割規定などである。彼はそこから生まれてくる「近代の害悪」として、疎外、搾取、社会的規範の喪失、「鉄の檻」つまり官僚制的拘束を挙げている。このような「近代」の特徴が、ポストモダンにおいては、高度な情報化と科学技術によって更に極端な状態にまで進むことで個人の幽閉感覚は強まり、カオスと浮遊性を特徴とする、方向感覚を喪失した社会が生まれてきたと言える。

このようなモダンからポストモダンへの社会的文化的変化のなかで、60年代アメリカ作家たちが幽閉的社会状況をどのように捉えているかを順次論じていきたい。

① Ken Kesey, *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (1962)

この作品と、次の二作品、Vonnegut の *Slaughterhouse-Five* と Heller の *Catch-22* は、精神病院・軍隊という共通する特徴をもつ幽閉の場を問題としている作品である。

インディアンと白人の混血の語り手 Bromden は、他の精神病患者と共に「郭公の巣」である「精神病院」に幽閉されている。精神病院の内と外には電子工学を利用した体制側の組織である「コンバイン」が網の目のように支配の「檻」を築き、冷徹な監視・監禁態勢を取る。これは、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) が指摘した「一望監視方式」(198-228)の現代版と言える(『監獄の誕生——監視と処罰』田村訳、新潮社)。このハイテクによる軍隊的統制は後期資本主義社会の特徴でもある。組織の手先である精神病院の絶対的な女性支配者 Big Nurse の下で患者たちは脅え、自己の身の安全を図るた

1960年代のアメリカ小説と幽閉状況

馬 場 弘 利

第二次大戦後の50年代は、ロックウェルの絵のような安定と豊かさの時代、資本主義大量消費社会の到来した時代であった。しかし、大戦によって世界の悪を撲滅したと信じ、新たな世界の創造の夢を膨らませたアメリカは、今度は米ソ冷戦構造という新たな難問に取り組むことになり、その結果、共産主義弾圧のための「赤狩り」を引き起こし、保守的統制的傾向を強めていった。物質的繁栄の陰でベトナム問題、人種問題も燻り始める。この時代を背景として、J.D. Salingerは *The Catcher in the Rye* (1951) において〈都市空間〉を、Ralph Ellisonは *Invisible Man* (1952) において〈不透明性の穴蔵〉を、Silvia Plathは *The Bell Jar* (1963) において〈釣鐘状のガラス器 (bell jar)〉を幽閉の場として選び、世代的、人種的、性差的閉塞状況を提示した。

次の60年代は所謂カウンターカルチャーの時代である。これは、公民権運動、ベトナム反戦運動、大学紛争、社会的弱者の権利獲得運動など文化的大変動の時期であり、社会のあらゆる面で伝統的価値観を問い直す運動が全国的に展開された。この時期は、また、核戦争の恐怖、テクノロジー優先、情報の氾濫、産業廃棄物による環境破壊のために、高度機械文明の発達に対する疑念が生まれた時代でもある。混迷した世相を反映してこの時期の文学には様々な形の幽閉状況が描かれている。Ken Keseyの *One Flew Over the Cuckoo's Nest* (1962)、Kurt Vonnegutの *Slaughterhouse-Five* (1969)、Joseph Hellerの *Catch-22* (1961) は、それぞれ〈精神病院〉〈捕虜収容所/幻想〉〈軍隊組織〉を、また、Thomas Pynchonの *The Crying of Lot 49* (1966)、Donald Barthelmeの *Snow White* (1967) は、エントロピーへと向かう現代アメリカ社会を背景に御伽噺の枠組みを利用して、〈塔 (tower)〉〈都市のアパート〉を幽閉の場に設定し、それからの出口を探っている。一方、Richard Brautiganの *In Watermelon Sugar* (1968)、Jerzy Kosinskiの *Being There* (1971) は